

モンゴル出張報告

1. モンゴル訪問の経緯・目的・訪問先

①モンゴル訪問の経緯

駐日モンゴル大使による日本とモンゴルの教育・ビジネスの連携を強化したいというご要望を踏まえ、それに応えるべく寺島実郎学長と齋籐勁氏（一般社団法人勁草塾代表理事、元内閣府官房副長官）を団長・副団長とする、日本の大学関係者、企業経営者からなるモンゴル訪問団が発足され、本学からは寺島学長以下 4 名の教職員が参加したものである。

②訪問目的

アジア諸国の教育機関との連携を国際交流の大きな方針とする本学としては、日本語学習者数が多く優秀な留学生が多数日本に派遣されているモンゴルの大学との間で交換留学を含めた学術交流の可能性を探る良い機会と捉え訪問団に加わった。仮に、今後現地の大学と提携ができた場合、本学の PR はさることながら中長期的な入試戦略の一環として、優秀な学生の確保にもつながっていくものと考えられる。

③訪問先

駐日モンゴル大使館のご協力を仰ぎながら現地の行政機関や民間シンクタンク（モンゴル外務省、モンゴル・日本関係促進協会、北東アジア協会など）をはじめ、大学や企業関係者などを訪問し交流を行った。本学としては、主に現地の大学との間で教育効果を見据えた提携の可能性について意見交換を行い、その後の連携・交流につなげていく予定である。

2 期間

平成 29 (2017) 年 9 月 15 日 (金) ～平成 29 年 9 月 18 日 (月)

3. 出張先

ウランバートル市 (モンゴル国)

4. 宿泊先

① BEST WESTERN PREMIER TUUSHIN HOTEL (15 日・16 日)

<http://bestwesternmongolia.mn/>

② CHINGISIIN KHUREE (17 日)

5. モンゴル訪問団メンバー (23 名)

<多摩大学 5 名>

寺島 実郎 多摩大学 学長・一般財団法人 日本総合研究所会長

久恒 啓一 多摩大学 副学長

金 美德 多摩大学 経営情報学部教授・教務委員長

バートル 多摩大学 経営情報学部准教授・国際交流委員長

黒瀬 洋 多摩大学 経営情報学部学生課課長

<神奈川大学 2 名>

<寺島実郎戦略経営塾 10 名>

<GIN 総研 1 名>

<勁草塾 5 名>

6. 日程詳細

<第1日目 9月15日(金)>

- 12:30 成田空港国際線第1ターミナル南ウイング4階J チックインカウンター(MIAT モンゴル航空)にて各自チェックイン。
13:00~14:00 第1ターミナル南ウイング4階 S-4号室にて訪問団全体のミーティング
14:40 OM 0502 便にて出発 19:10 チンギスハーン空港着
20:00 BEST WESTERN PREMIER TUUSHIN HOTEL チックイン
20:30 ホテル内にて夕食懇談会



成田空港全体ミーティングの様子



夕食懇談会の様子

<第2日目 9月16日(土)>

- 9:30~10:30 スヘバートル広場見学
9:30~10:30 モンゴル・日本関係促進協会表敬訪問(会場:モンゴル外務省内)
モンゴル側出席:D・ソドナム名誉会長、C・フレルバートル会長、P、ジグジド副会長、
C デンベルル執行役員他
10:00~11:10 モンゴル側と昨今の世界情勢についての意見交換会

<意見交換会の概要>

ソドナムモンゴル・日本関係促進協会名誉会長:

「1990年の3月に日本を訪問した当時は宇野外相。海部総理大臣からの招待がありモンゴルとしては困難な時代であったけれども、訪問を決断した。ウランバートルと東京には直行便がなくハバロフスク経由であった。訪問は成功した。モンゴルとしては初の西側への訪問となった。このとき初めて日本と日本人について初めて接したことになる。1949年23歳の私は地方からウランバートルに出てきた。当時は日本人抑留者がインフラの建設に当たっていた。この外務省のビルやオペラ劇場の建設にあたった姿を見たことがある。1990年の記者会見では若者の政府への反対運動の広がりをどう思うかと聞かれた。私は将来世代の代表であり政権を引き渡すことに抵抗は無いと答えた。1990年3月4日に帰国。3月7日ハンガーストライキ。3月8日国営テレビで若者たちと意見交換。3月9日党本部にて全国民向けの談話を発表し政権を受け渡すと表明した。社会主義から市場主義への平和的な方法で移行した初のケースだった。この時ソ連からの支援が中止となってモンゴルは苦境に陥った。援助を求めているこの時期に日本がリーダーシップをとって支援してくれた。このことをモンゴル国民はよく理解している。1994年日本モンゴルの関係を促進するこの協会を設立した。1つだけ現在の課題を述べる。モンゴルは地下資源が豊富であり銅や金をたくさん産出できる。そして家畜は大変多い。しかし課題としては食肉加工の工場の運営がまだできていない。」

寺島学長:

「この8月まで日本大使であったフレルバートル先生に感謝を申し上げる。大使には敬意を表したいと思う。1つは、日本のモンゴル学が大いに発展しているのはフレルバートル大使のおかげでもある。岡田英弘「世界史の誕生」など歴史学者が育てているがこれはバートル大使の支援と参画のおかげである。2つ目は北朝鮮大使の経験をもとに北朝鮮と日本モンゴルをつなぐ役割を果たされたことである。私の親しい経済人であるソフトバンクの孫さん、HISの澤田さんなどがモンゴルに於いて大きなプロジェクトを展開しているのを心強く思う。ソーラー風力、アジアスーパーグリッド構想。大学連携では、多摩大、神奈川大学とモンゴルの大学との連携を模索したい。そして深みのある関係にしていきたいと思う。」

斉藤勁先生:

「2011年の民主党政権の官房副長官として1月にウランバートルに来たことがある。その時北東アジアの中のモンゴルに対して何ができるのか、思いを巡らしてきた。母校である神奈川大学を通じて若者の交流を進めていき

いと思っている。

外務省のE・サラントゴスアジア太平洋局長:

「モンゴルの外交政策の1番目は多元的でオープンな外交政策だ。2番目はバランスという哲学である。3番目は中国とロシア以外の第3の隣国との交流である。価値を共有している第3隣国としては、アメリカ、日本、韓国、トルコ、インドなどがある。国連を大切にしているし、社会主義時代の友好国であったラオス、ベトナム、北朝鮮などとも友好関係を深めていく。そして発展途上国との連携も図りたいと思う。来年は北朝鮮との外交関係樹立70周年だ。モンゴルが北朝鮮の子供を育てて帰国させたりしたこともあり金日成出席も2度モンゴルを訪問している。国連の安保理事会の決議を実行する。一方で韓国、北朝鮮にもモンゴル人が住んでおり戦争はだめだ。対話のパイプを残したい。モンゴルには野心は無い。対話のイニシアチブをとっていききたい。北朝鮮の核ミサイル許さないし、安保理の決議を支持している。そして国際社会との協力を進めていききたいと思っているが、北朝鮮とアメリカとの対話のチャンスを残したいと思う。」

寺島学長:

「この夏アメリカ欧州を回ってきた。その中で北朝鮮問題を議論してきた。まず指摘しておかなければいけない事はトランプ政権の性格が変わってきたことだ。ケリー、マティスなど軍事専門家が中心になってきて戦争計画が具体的になってきている。第二次大戦では日本に対するオレンジ計画があったが、現在北朝鮮に対してはブラックスワン(黒鳥)計画がある。アメリカは先制攻撃は避ける。韓国は融和的であり、ロシア中国が反対するからだ。もし軍事衝突があれば徹底的に叩くシナリオがある。カーボーイメンタリティー。海上封鎖があれば衝突が誘発される。この時アメリカは北朝鮮の電力、ネットワークを完全に遮断することになるだろう。イラクのフセインとの戦争と同じだ。ここで1つのためらいがある。中国、ロシアも統一朝鮮は望んではいないのではないか。北は反撃能力があり、もし戦争やれば体制の転覆まで行かざるを得ない。日本政府の公式スタンスは、アメリカのすべてのオプションを全面支持するとしている。しかし私はこれは問題があると思う、各攻撃も含まれていると思われるからだ。この7月7日、ウィーンで122カ国による核兵器禁止条約に日本は反対した。オーストリアは日本こそ先頭に立つべきだと言っていた。北東アジアの非核化については日本の見識を示すべき時である。今日共通の方向感が必要であり、北東アジア全体の非核化をなんとしても行わなければならない。」

斎藤先生:

「緊張緩和に知恵を出さなければいけない。対話の場。2018年はモンゴルと北朝鮮の国交樹立70周年とも聞いた。朝鮮半島の混乱については日本にも責任がある。ぜひウランバートルで対話の機会を持つことを北朝鮮に電話してもらいたい。」

11:30~13:00 モンゴル国立民族歴史博物館見学

13:00~14:10 昼食(ShangriLa ホテル1階 CAFE PARKにて)

14:30~ モンゴル国立大学訪問 多摩大学(久恒・金・バートル・黒瀬)

モンゴル側:同大国際交流局N・オチルホヤグ局長

多摩大学関係者は、モンゴル国立大学を訪問。同大学は、1942年に設立されたモンゴル最古の大学で芸術・科学学部、応用化学学部、商学部、法学部、国際関係、行政学部など五つの学部を有する総合大学であり、地方に三つの分校(オルホン校、ザヴェンハン校)が点在する。学部生:21,521名、大学院生:2,883名(修士課程)+894名(博士課程)、留学生:286名。教員数:専任815名、非常勤276名、その他職員633名。

我々の訪問を同大副学長で国際交流担当のN・オチルホヤグ氏が対応して下さった。まず双方の大学の紹介から始まり、その後、両大学の提携の可能性について意見交換を行った。結論としては、今後単位の認定等の問題もあり複数の教員による作業部会を立ち上げ詳細を詰めていくこととなった。

また、同日夕刻に行われたモンゴル訪問団とモンゴル側との交流会にて、モンゴル金融経済大学の学長と意見交換を行った。同大学は観光に注力している大学で、人と自然が調和・融和されたモンゴル伝統の遊牧文化の知恵を観光を通じて北東アジア地域へ広めていくという高い志と深い哲学を持ったツーリズムを追求している。意見交換の際に、今後多摩大学・モンゴル財政経済大学・神奈川大学の三大学が協力した形での教育連携を行うことのポテンシャルが大きいということで意見が一致した。今後、メールなどを通じてコンタクトを取りながら具体的な提携方法を探ることとなった。

14:30~ モンゴル金融経済大学訪問 神奈川大学

モンゴル側:ドルゴルマー氏他

15:00~ 経済人はダンパダルジャー日本人慰霊碑へ(多摩大学・神奈川大学関係者を除く)

16:30~ 経済人会議(日本側:寺島学長、GIN 総研林様、戦略経営塾10名、勁草塾丸山ご夫妻・星野様、モンゴル側:タバンボグド・グループ、ブリッジ社、モンニス社、ミコム社など各社社長ご出席
会場:ハーン銀行タワー15階会議室)

16:30~ 北東アジア協会訪問(日本側:斎藤氏、多摩大学関係者、神奈川大学関係者、

モンゴル側:バーダル氏、L・ボルド氏、バダムディン氏

会場:宿泊ホテル

<北東アジア協会とのミーティング概要>財務大臣経験者など高いレベルの方々をご出席された。

バーダル氏:

「日本と北朝鮮の問題については二国間ではなく、モンゴルで協議するのが良い。独裁政権は独裁者がいなくなると体制が一気に変わる。北朝鮮は 15,000,000 人のソウル市民を人質に取っている形だ。日本とアメリカは戦争はできない。日本はこのことを知っているはずだ。北朝鮮は 1948 年の建国以来モンゴルと北朝鮮は常に往來をしている関係にある。北朝鮮を 2 番目に認めた国がモンゴルだ。モンゴルは解決まではできないができることもある。協議をウランバートルで二回したことがあるし、拉致被害者に関わる孫との面談もウランバートルで実行した。モンゴルの立ち位置はノルウェーと似ている。何事も控えめに。脱北者を 7,000 人から 8,000 人ほどモンゴル経由で韓国に逃しているが北からの批判は無い。国民やメディアもこのところ北朝鮮にはやや批判的になっている。国民同士の交流が大事だ。このことが対立をなくすことになる。北朝鮮の労働者の受け入れと交流は、北朝鮮の国民の視野を広げることになっている。北朝鮮はモンゴルの経験に関心を持っている。制度と実行には距離がある。じっくりとやらなければならないため時間がかかる」

斉藤先生:

「今後モンゴルの役割はますます重要となっている理解し合うと言うことが大事だ。国民同士の交流についてあらゆるチャンネルを覗く必要がある。その鍵はモンゴルではないか。」

バーダル氏:

「アメリカのプレッシャーに寄ってきたとの交流は減ってきていることを少し心配している。日本最初の無償援助であるゴビ砂漠のカシミヤ工場についても 60 名の女性を北に送還。この点については日本ももっと気を使う必要があると思う。北からのプレッシャーもある。国民の交流によって不都合なことが知られてくる。だから慎重になっている面もある。日本はアメリカにやり過ぎだと言うべきである。」

斉藤先生:

「政権が変わっても対話の方針を維持しているのは素晴らしいことだ。民主化前後のご苦勞は察して余りある。北東アジア協会並びにモンゴル政府の主導によって対話の場を設定していただけるとありがたい。学界の会議も行っていくべきである。」

18:30～ 日本・モンゴル交流会(日本側 23 名、モンゴル側 7 名、ビュッフェスタイルで

会場はハル・ソブドレストランにて) ※C・フレルバートル前駐日モンゴル大使、寺島学長、齋藤氏、エルデンツォグト・サラントゴスモンゴル外務省アジア太平洋局長よりご挨拶

斉藤先生ご挨拶:

「若者に未来を託したい。この訪問団はまだ 8 時間しか経っていないが何日間も経過した感じがあるのではないかな。一つ一つの積み重ねが大事だ。発信しそして行動に繋げたい。学び合うことが大事だ。自分たちが何をするか何ができるかを一緒に語り会おう。」

外務省アジア太平洋局長ご挨拶:

「日本とモンゴルの国交樹立 45 周年の年である。7 月には大島議長が訪問された。この夏は 6-7 割が日本との仕事であった。」

寺島学長ご挨拶:

「この夏のウイーンにおける中東協力会議では OPEC や石油の問題を議論した。まさにユーラシアのパラダイムチェンジが起こっている。ロシアのプーチン。習近平の中国。北朝鮮。モンゴル。戦略的意思で向き合おう。小さいが重要な一歩だ。それぞれがどう動くのか。」



スフパートル広場



訪問団全体写真



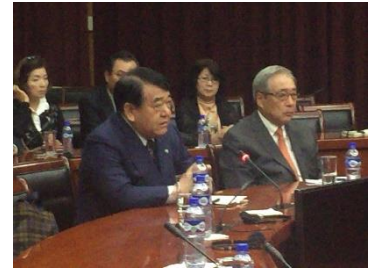
モンゴル外務省



会談の様子



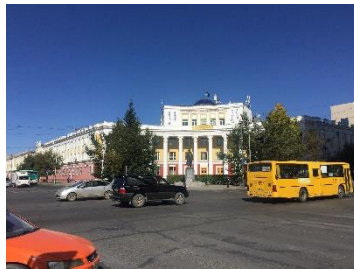
D・ソドナム名誉会長 (中央)、C・フレルパータル会長 (右)



寺島学長 (左)、齋藤氏 (右)



国立民族歴史博物館見学



モンゴル国立大学



モンゴル国立会談の様子



北東アジア協会会談の様子



日本・モンゴル交流会の様子



日本・モンゴル交流会の様子

<第3日目 9月17日(日)>

5:30 寺島学長他4名は、チンギスハーン空港国際線出発
7:55 出発 OM 0501 便 13:40 成田国際空港着

- 9:00～10:00 ガンダン寺見学
- 10:10～11:00 ノミンデパート(旧国営デパート)見学
- 11:15～11:45 ザイサン・トルゴイ見学
- 12:00～12:45 ボグド・ハーン宮殿博物館
- 13:00～14:00 昼食 MIRAGE RESTAURANT(ゴビーカシミア工場近く)
- 14:00～15:30 ゴビー社工場見学・アウトレットモール視察
- 16:00 CHINGISIIN KHUREE へ移動・宿泊



ガンダン寺見学



ノミンデパート見学



ザイサン・トルゴイ見学



ボグド・ハーン宮殿博物館



ゴビー社工場見学



ツーリストキャンプ

<第4日目 9月18日(月)>

12:00

出発 OM 0501 便 17:50 成田国際空港着

※定刻 7:55 出発のところ成田空港周辺の天候不良のため 4 時間遅延

8. 所感

- (1) 今回のモンゴル訪問では、現地政府機関、民間団体、そして大学を訪問し、いく先々で非常に有意義な意見交換ができた。モンゴル国は、南北に中国とロシアという二つの大国に挟まれた北東アジア内陸部に位置する小国ではあるが、隣国との良好な関係を維持しつつも米国や日本、韓国など「第三の隣国」との関係も重視する多角的な外交を行っている。1992年の民主化以降、北東アジア地域の非核化の提唱、日朝交渉の仲介など、北東アジア地域の平和促進と経済・貿易など経済連携に向けた共通課題の解決のために小国ならではの役割を果たしてきた。とりわけ、日本との関係においては、モンゴル国政府はモンゴル最大の支援国（1977～2016年までに計3,000億円の資金技術援助を実施）である日本との関係を最重要視しており、2016年には両国間の経済連携協定（EPA）が発効された。モンゴル国は銅や金など豊富な鉱物資源に加え畜産業も大きな潜在力を持っており、EPAの発効を起爆剤として今後における日本とモンゴルの経済交流の拡大が期待されている。
- (2) 一方、対北朝鮮関係においては、1948年の国交樹立を皮切りに朝鮮戦争時に北朝鮮に対し食肉や生きている馬を提供したほか、数多くの北朝鮮の戦争孤児を引き取って育てた経緯もあり、社会主義時代以来の良好な関係を現在も維持しながら北朝鮮問題の対話による解決に向けた取り組みを積極的に行っている。今回のモンゴル訪問を通じて、北東アジア地域におけるモンゴル国の地政学的重要性とこの地域の平和と繁栄のために役割を果たそうとするモンゴル国の強い意志を感じることができた。
- (3) 日本語学習者数が多く優秀な留学生を多数海外に派遣している現地の大学関係者と今後における教育連携の可能性について大変有意義な意見交換を行った。本学は、国際交流活動の大きな方針として、「中華圏とASEAN地域との教育連携」「ハブ&スポーク」を掲げているが、今回のモンゴル訪問を通じて国際交流活動の方向性をより発展的に「中華圏とASEAN地域、北東アジア地域との教育連携」に広げていく必要性を痛感させられた。また、同時に日本国内の大学間においても、それぞれが持っている限られた資源（海外の協定校、国際交流のノウハウなど）を共有しながらキャンパスを超えた緊密な連携と交流の重要性にも気づかされた。
- (4) 最後に、今回のモンゴル訪問に際し、多大なるご支援とご協力を頂いた前駐日モンゴル国特命全権大使のソドブジャムツ・フレルバータル氏をはじめ、駐日モンゴル大使館の方々に改めて感謝申し上げたい。

以上